

一次の文章は、二〇一一年に起きた東日本大震災にまつわるものである。以下、大学生のアイとミナがスカイプ（インターネットを通じた映像会話）をしている場面が描かれている。アイは両親と離れ、ひとり東京で暮らしている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「ふう……。」

いつもなら、そろそろこの時間を終わりにする頃だった。でもミナは、まだそこにいた。伸びた髪を束ね直し、ペットボトルから水を飲んだ。

「洗濯物、いいの？」

「ああ。うん。」

何か言いたいことがあるのだろうか。アイがそう思ったのと同時に、ミナが口を開いた。

「ねえアイはさ。」

「うん。」

「なんで残ったの？」

「え？」

柔軟剤の香りがした。室内に風が吹いたのだ。窓を開けていても、空気は常に動いている。最近気づいたことだった。アイのパパもママも、私だって海外にいて、いつだってこっちに來られたじゃん。」

きつとミナは、ずっとこのことを聞きたかったのだ。

「責めてるんじゃないからね。アイがそんな風に強く何かを決めることって珍しいから、何かあったのかと思って。」

珍しい、とミナは言ってくれているが、それはきつと初めてのことだった。ミナも驚いたに違いない。震災後繋がった電話で、ミナは両親と同じ熱量でアイに訴えたのだ。「そこを離れなさい」と。やがてアイのかたくなさに折れたが、それでもミナは連絡してくるたび、アイの心が変わらないうちに聞いてきた。

「何かあったの？ 嫌なら言わなくていいけどさ。」

今なら聞いてもいいと思ったのだろう。確かに例のかたくなさは消えていた。アイ自身でさえ、あのときの自分に驚いているくらいだった。

1 どうして自分は、あんなに強固でいられたのだろう。

どうしてあんなに強く「NO」と言えたのだろう。

「いや、嫌じゃないけど……、説明しづらいんだ。」

「説明しづらい？ 言ってみてよ。しつこいけど、嫌じゃなかったらね。」

ミナは、いつまでも待つ、という顔をしていた。そしてきつと、分からないことに対して分かったふりをしないだろう。ミナはそれだけで信頼に値する人に見えた。

「なんていうか……。」

「うん。」

2 「今まで私、ずっと免れてきたと思ってたの。」

「免れてきた？」

「そう。あの、ね。軽蔑しないではいいんだけど。」

「しないよ。約束する。」

「私、ずっと死んだ人の数を書いているの。」

今までずっと黙ってきたことを、こんな風にあっさり打ち明けることが出来る。自分はやはりまだおかしな興奮状態にあるのかもしれない。そう思ったが、止められなかった。ミナに聞いてほしかった。たったひとりの親友に。

「死んだ人の数？」

「そう。世界中で起こってる事故や事件や災害で死んだ人の数を、ノートにずっと書いてるの。」

「いつから？」

「……ノートは、2005年からになってる。」

「えっと、高校のときか。もう私と会ってた？」

「うん。会ってた。」

「死者の数って、どんな風に？」

「起こった事件や災害の内容と一緒に、何人死んだって、シンプルだよ。」

「日記ではないのね？」

「うん、違う。」

「そっか。どうして？」

どうして、と聞いてくれる人は今までいなかった。何故ならノートのことは誰にも話していなかったからだ。でも、

自分でも時々「どうして？」と思っていた。死者の数を書き続けること、その行為に私は何を求めているのだろう。

「……分からない。」

「そっか。」

3 アイは沈黙した。自身のこの沈黙の先にあるものを探した。ミナには正直でいたかった。ミナにだけは。

「……きつと、知っておきたいんだと思う。」

「知っておきたい？」

「うん。私がこうやって生きている間にも、世界ではたくさん、本当にたくさんの方が死んでる。」

「うん。そうだね。」

「そのことを、きちんと知っておきたいのかもしれない。もちろん、すべての死んだ人を書くことは出来ないし、何人って書いている時点でまとめちゃってるんだけど。まとめるって、すごく……怖いけど……。」

ミナの唇がわずかに開いていた。真つ赤な舌と、紙のように白い歯のぞいている。

「その死んだ人の中に自分が入っていないことが、免れてきたと思ってたということ？」

あ、と、声を出した。自分から言ったことなのに、ミナに言われて驚いた。自分は何を言っているのだろうか？

「……うん、そうだね。そう。ずっと、免れてきたと思ってた。どうして私じゃなかったんだろうって。」

「うん。」

「どうして死んだ人が私じゃなくてその人たちだったんだろう。その人と私の違いは何なんだろうって。」

「うん。すごく難しいね。でも分かるよ。」

ミナが分かる、と言ってくれたことに勇気を得た。そして同時に「ミナには分からない」とも思った、強く。私は、何が言いたい？ アイは自分から分からなかった。

「私、養子じゃない？ シリアから来て、アメリカ人の父と、日本人の母に引き取られた。」

「そうだね。」

「シリアで、きつと何らかの困難な状況にあった私を、誰かが選んでくれた。そうして、今の両親に出逢わせてくれた。裕福な両親に。」

(中略)

「シリアから両親の元に来たことは、本当に幸せなことなんだと分かっている。でも、それ以上に……、なんだかずっと……、申し訳なかった。もちろん幸せ、本当に、私は幸せすぎるくらい幸せだよ。申し訳ないと思うことなんて傲慢だということも分かっている。でも、ずっと、誰かの幸せを不当に奪ったような気がしていて。」

「誰か？」

「そう。私の代わりに両親にもらわれるはずだったシリアの誰か。もしかしたら私がシリアに残っていたかもしれない。そしてその誰かが、私の両親の元で幸せに暮らしていたのかもしれない。私はその人の幸せを、もしかしたらその人の命も、奪ってしまったのかもしれない。」

「アイ。」

「ひどいこと言ってるのは分かっている。私は自分の環境に感謝すべきだし、幸せなことを幸せに思うべきだよね。」

「べき、ではないよ。感謝とか幸せって、努力して思うことではないんだよ。自然にそう思うことなんだから。アイがそう思えないのなら、無理に思うことない。」

「でも、本当に思うの、幸せだって。私は本当に幸せ。でも、幸せって思えば思うほど……。」

「苦しいのね？」

ぐ、と喉が鳴った。私は「苦しい」と言っているのだろうか。いわれない、「本当の苦しみ」を苦しんでいる人たちがいる世界で？

「苦しいって、言っていないんだよ。」

ミナは、まるでアイの胸のうちを見透かしているようだった。

「それってあなたの苦しみなんだから。それに嘘をつく必要なんてない。あなたは馬鹿じゃないから、そのことを私以外には言えないだろうって思う。そうだね、馬鹿じゃないどころか、賢すぎるんだ。」

「そんなことない。」

「正直になろう、アイ。あなたは **I**。言い方を変えるね。 **II**。」

「……そう、だね。それはそう。」

「そしてもちろん、それがアイなんだから、考えすぎるのがあんななんだから、それも変えなくていいと思う。」

ミナの瞳孔がわずかに動いていた。何かを真剣に考えているとき、人間の瞳孔が震えることを、アイはミナを見て知った。

「それで、地震が起こった国に残りたかったの？ 安全な場所に逃げるのが嫌だったの？ ずっと免れてきたから。命が助かってきたから。」

ミナの言うことを聞いて、アイは大声で叫び出したくなった。確かにその通りだった。ずっと免れてきたと思っていた。た。
*阪神淡路大震災を、シリアの内戦を、9・11を、*ハイチの地震を、世界中の悲劇を、自分は免れてきた。免れ、そして生きてきた。肥え太り、誰にも自身のからだに触れられることなく、そして将来何かのために生きようと思わず、

両親の金で、両親の家で、ただのうのと生きてきた。

今こそ自分が渦中かちゅうにいるときだ、い続けるべきだ。アイはそう思ったのだ。

でも、人の声で聞くそれは、自分が思っていたよりも傲慢がうまんでおぞましかった。東京の大きく頑丈がんじょうな家に残ることで被災地の人たちの気持ちがかかるはずもなかったし、ましてや誰の命が助かるわけでもないのだ！

「あなたがどんな思いでいるか分かるよ、今。ものすごく恥はずかしいでしょう？」

「うん。」

アイはミナに責めてほしかった。甘えてんじゃない、矮小わいしょうな自己満足を得るために、両親に心配をかけて、それで被災者にでもなったつもりなのか？

でも、ミナはアイを責めなかった。画面越しに、アイをはっきりと見すえた。きっとアイの目を見ているはずだったが、スカイプを通してどうしても目が合っている感じがしなかった。

「あのね。でも、アイは起こったことに、胸を痛めているんでしょう？」

「え？」

「東日本で起こっていることに、そして世界中で起こっていることに、胸を痛めている。でしょう？」

「うん。」

それは本当だった。それだけは心から言えた。アイは東日本で起こっていることに、そして世界中で起こっていることに、胸を痛めていた。被災した人たちのことを思うと、そして悲劇に巻き込まれた人たちのことを思うと、胸が張り裂けそうだった。

「だからこそ思うんだよね、どうして私じゃないんだろうって。」

「うん。」

「その気持ちは恥はじなくていいよ。恥はじる必要なんてない。どうせ自分は被災者の気持ちが分からないだって乱暴になるんじゃないかって、恥はずかしがりなはずと胸を痛めていればいいんじゃないかな。よく分からないけど、その気持ちは大切だと思うんだ。何かに繋がる気持ちだと思うから。」

アイは両親に送ってもらっていた中の、少ない金額を寄付していた。そうすることで少しでも罪悪感5から逃れたかったからだ。もちろんそれだけではなかった。苦しい思いをしている人のことを思うと苦しかった。何かせずにはいられなかった。自分の行動が誰の役にも立っていないかもしれないと思うことが苦しかった。そしてそうやって寄付した金が、自分が稼いだ、汗をかいて必死で稼いだ金ではなく、両親の金、潤沢じゆんたくにある両親の金であることが恥はずかしかった。

自分は何も傷ついていない。
自分は何にも□を染めていない。
自分は何にも□を染めていない。

「「こっちにいるとき、至るところで日本の国旗を見るの。」
エンパイアステートビルが日本国旗の色に染められたのを、アイもニュースで見た。
「みんなが日本のために祈いのっている。私も彼らも日本にいなかったし、地震の被害ひがいにも、原発の被害げんぱつにも遭あわなかった。でも、じゃあ私たちに祈いのる □ はないって、アイは思う？」
ミナはアイをじっと見ていた。目は合わなかったし、瞳孔はもう動いていなかったが、それはアイのことを思っている、まっすぐな視線だった。
「思わない。」
「誰かのことを思って苦しいのなら、どれだけ自分が非力ひりきでも苦しむべきだと、私は思う。その苦しみを、大切にすべきだって。」
アイはミナに会いたいと思った。心から。画面の向こうから、自分のことをこんなにも思ってくれている親友に、アイは会いたかった。
「相対的に見たら、あなたのしてることは間違まちがってる。間違まちがってるのとは違うか、でもあなたの言うように傲慢だと思おもうし、私たちに心配をかけてる。分かるよね？ でも、今は相対なんて知らない。あなたは私の親友だから、それは絶対なんだよ。私はアイの気持ちを尊重する。分かりたいと思う。」
「ありがとう。」
「おれなんて言わなくていい。その代わり、ごめんなさいも言わなくていいからね。あんた今、言おうとしてたでしょ？」
「うん。してた。」
「だめだよ。謝あやまったらだめ。アイがそこに無事でいてくれること、私は本当に嬉しいんだよ。その苦しみごと、アイがそこにいてくれたらそれでいいんだ、私は。分かる？」
「うん。」
「思う存分ぞんぶんいなさい。そこに。」
「うん。」
ありがとうと、ごめんなさいを言っではいけないのであれば、何を言えればいいのだろう。アイは言葉に困った。でも、先にミナが「それ」を言ってくれた。
「大好きだよ。」

アイもそうだった。ミナのことが好きだった。だから言った。

「ミナ、私も大好き。」

その言葉は、美しい雨のようにアイの心を洗った。ミナはアイの心に、忘れていた健やかさを戻もどしてくれた。「大好き。」

(西加奈子「i」による)

- * 阪神淡路大震災……一九九五年一月に兵庫県南部で発生した地震災害。
- * シリアの内戦……二〇一二年三月から始まったシリア内部での武力衝突。
- * 9・11……二〇〇一年九月にアメリカ合衆国内で起きた同時多発テロ事件。
- * ハイチの地震……二〇一〇年一月にハイチ共和国で発生した地震災害。
- * エンパイアステートビル……アメリカ合衆国のニューヨーク市にある超高層ビル。

問1——線1「あんなに強固でいられた」とあるが、アイはどういうことに「強固」であったのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の信念をつらぬいて、生まれて初めて両親や友人に反抗すること。
- イ 被災した日本にあえて残ることで、地震に対する恐怖を克服すること。
- ウ 震災直後の日本にとどまり、震災で被害にあった人々を支援すること。
- エ 震災の当事者であり続けることにこだわり、被災した日本に残ること。
- オ 両親や友人との連絡を断って、被災地に残った理由を秘密にすること。

問2——線2「免れてきた」と感じるのは、アイが自分自身をどのような人間だととらえているからか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 生きる意志がなく、死者の気持ちにばかり興味を持ってきた人間
- イ 運が良かったという以外に、とくに理由もなく生き残ってきた人間
- ウ 幸運に恵まれたことを喜んで、他人の不幸を忘れてしまった人間
- エ 他人を傷つけ、不幸にさせてしまった罪から逃れ続けてきた人間
- オ 母国と呼べる国を持たないため、国民意識が弱まってしまった人間

問3——線3「この沈黙の先にあるもの」の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉にしくなくとも、互いの思いが通じ合う二人の新たな関係
- イ 自分のことを真剣に考えてくれる友人を納得させる理由
- ウ 真実を話すことにより、友情を失うかもしれないという恐怖
- エ 誰にも言わずにいた自分の本心を友人の前でさらけ出す覚悟
- オ 誰にも知られずにくり返してきた行為の中に秘められた意図

問4——I、II に入れるのに最もふさわしい言葉をそれぞれ本文中から六字以内でぬき出しなさい。

問5——線4「傲慢でおぞましかった」とアイが感じたのはどのような点からか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 震災が起きたことを悲劇に身を置く格好の機会だととらえており、さらには安全な場所から被害者の気分ひたろうとしていた点。
- イ 震災が起きたことをわざとらしく悲しみ、世界で起きている悲劇をひとりで背負いこむことで自己満足にひたろうとしていた点。
- ウ 被災者が何に苦しみ、どのような助けを求めているかを理解することができず、さらにはいら立っているように聞こえた点。
- エ 被災者になったつもりが、実際は安全な場所から不幸な人々をながめ、その苦しみを観察しているように聞こえた点。
- オ 被災者の本当の苦しみを理解しようともせず、さらには自分だけ安全な場所に逃げて被災者をあざ笑っているように聞こえた点。

問6——線5「罪悪感」の内容を具体的に言い表した次の文の□に入る十五字以上二十字以内のふさわしい言葉を本文中からぬき出し、はじめと終わりの三字を答えなさい。

□になること。

問7 ―線6「□を染めていない」の□に入る体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

問8 Ⅲ に入れるのに最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 感性 イ 義務 ウ 権利 エ 資質 オ 責任

問9 ―線7「相対的に見たら、あんたのしてることは間違ってる」とあるが、ここでミナはどのようなことが言いたかったのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アイの行動自体が悪いわけではないが、誰の役にも立たなかった点では許されない行為だということ。
イ アイの行動は実際に苦しむ被災者の気持ちを逆なでし、両親や友人の反感を招く行為だということ。
ウ アイの行動は大した意味もなく、むやみに両親や友人を心配させただけの愚かな行為だということ。
エ アイの行動は他者を見下したものであり、被災者のために祈る人々の心を否定する行為だということ。
オ アイの行動は両親や友人への配慮に欠けており、彼らの優しさにつけこんだ裏切り行為だということ。

問10 ―線8「その言葉は、美しい雨のようにアイの心を洗った」とはどういうことを表現しているか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ミナの「大好き」という言葉は、アイの存在を無条件に認めるものであり、この世界に存在しているという実感をアイに取り戻してくれたということ。
イ ミナの「大好き」という言葉は、震災によって深く傷ついたアイの心をいやすものであり、震災が起こる前の明るい気持ちを取り戻してくれたということ。
ウ ミナの「大好き」という言葉は、他者の存在をあたたく受け入れるものであり、投げやりになつていたアイの心を前向きに変えてくれたということ。
エ ミナの「大好き」という言葉は、ミナがようやくアイをかけがえのない親友として認めたことを意味し、アイに大きな自信を与えてくれたということ。
オ ミナの「大好き」という言葉は、悪い面も含めてアイのすべてを受け入れるという意味であり、アイが抱えてきた罪悪感をぬぐい去ってくれたということ。

問11 登場人物のミナについて、次のように考察した。次の文中のA Eに入る最もふさわしい言葉を後の語群からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ミナはAを通してアイの心を解き明かす存在である。すなわち、自分の考えを少しずつ語っていくアイの言葉に耳をかたむけ、それらを整理し、より明確な言葉に変えてアイに示していく。そうしてアイは自分自身が何を考えていたのかを改めてBするのである。このプロセスを通して、ミナはさらにアイの内面を明らかにしていく。すなわち、アイは自らが養子であることから常に罪の意識を抱えて苦しんできた。そしてアイが今感じている幸せにCして、その苦しみはDしていくのである。

このようなアイの苦しみを理解したミナは、その苦しみの背後に、今なお悲劇に苦しんでいる人がいることに胸を痛めているアイの本当の気持ちも含まれていると指摘する。この痛みこそアイにEなものであり、大切にすべきものだミナは語るのである。

【語群】
ア 解決 イ 議論 ウ 後悔 エ 固執 オ 固有
カ 自覚 キ 消滅 ク 説得 ケ 善良 コ 増大
サ 対話 シ 転化 ス 反発 セ 批評 ソ 比例

問12 本文の内容に合致するものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア アイが死んだ人の数を記録し続けるのは、その人々が受けた苦しみを平穏な日常の中で忘れないためである。
イ アイは自分のことを考えてくれるミナの真剣さに感動し、二人の間をへだてる距離をもどかしく思っている。
ウ アイはミナの真剣な態度に心を動かされ、これまで抱えてきた苦しみをはっきりと言葉にすることができた。
エ ミナがアイを勇気づけている時にはすでにアイに対する怒りは消えており、ミナの瞳孔は震えていなかった。
オ ミナにとって最も大切なことはアイがあらのままに生きることであり、その行いの善し悪しは問題ではない。
カ ミナはあえて厳しい口ぶりでアイを責めることによって、アイが抱えている罪の意識をやわらげようとした。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（作問の都合上一部表記を改めている）。

石川県の西のはずれ、福井県との境近くに大聖寺という町がある。そこに錦城という小学校があつて、その学校で私は六年間の小学校生活を終えた。たしか尋常六年の時に、明治天皇が崩御されたように記憶しているので、私の小学校時代は、明治の末期に当たるわけである。（中略）

明治の末期と言っても、北陸の片田舎までは、まだ文明開化のAは押し寄せて来ていなかった。たしか六年生の頃に、初めて電灯がついたくらいで、徳川時代からずっとよんでいた空気は、まだこの小さい旧い城下町の上を低く蔽っていた。旧藩主は町の一部に、別の御屋敷をもつて、一年の半ばはそこに住んでおられた。そして人々はお正月には「殿様のところへ伺候する」習慣をずっと守っていた。

小学校のすぐ後ろは、小さい山に続いてた。錦城山という山であつた。この山には前田家の以前に、山口玄蕃とかいう豪族の城があつたそうである。そしてその城が落城する時に、奥方や姫たちが、池に入るか崖から飛び降りるかして死んだというような伝説が残っていた。この小高い山は、その当時の子供たちの間には、全く人跡未踏の魔境であつた。山は二段になつていて、頂上に本当の城跡があるという話であつたが、そこは恐ろしくて、とても子供たちの行ける場所ではなかった。私などは六年間の小学校生活中に、一度もその城跡までは登らなかつた。そこには、2響をさした蛇だの、両頭の蛇だのがいるという噂があつた。もちろん一つ一つに落城の伝説がからまつていて、子供たちはだれもそれを疑わなかつた。（中略）

ピアノなどというものは、名前も聞いたことがなかつたし、理科の実験などももちろん無かつた。仏教の盛んな土地だけに、町全体の雰囲気には近代の匂いが全く無く、科学などというものには、凡そ無縁の土地であつた。子供たちは、大人の読み残した貸本の講談本を盗み読むくらいで、その当時あこがれの的であつた『少年世界』や『日本少年』を毎月とっているなどという子供は、級に一人か二人という程度であつた。それは遙かなる土地の文明の余光であつて、年寄りたちがお説教でいてくる仏教の因果話と地獄極楽の絵とで培われた子供たちの頭には、幻惑的な閃光をもたらしものであつた。

そういう中であつて、たしか五年生の時だつたかと思うが、珍しい先生が新しくみえて、その先生が私たちの受け持ちとなつた。そして理科の時間に、進化論の話と、*カント・ラプラスの星雲説とを説明してくれたことがあつた。その先生の進化論というのは、少し極端であつて、人間からアメーバに遡つて、そのアメーバが更に無機物から出来たというのであつた。もつともそれは子供心にそういう風に受け取ってしまったのかもしれないが、とにかくそれは当時の私には驚愕に近いものであつた。

そしてそれが星雲説になると、更に展開するのであつた。遙かなる昔、まだ太陽も月も地球もなかつた時代に、星雲が宇宙の片隅に渦を巻いていた。その渦がだんだん凝つて固体になるというのであるが、そのガス状の星雲の前には、宇宙にはただ力だけが渦を巻いていたという話を聞かしてくれたように憶えている。これも幼い頃の夢であつたのかもしれないが、私の頭に残った印象は、3そのような形のものであつた。

学校から帰ると、よく夕飯前に、奥の暗い六畳の仏壇の間で、老人たちの御まいりの座につかされた。灯明の光がゆらぐ毎に、仏壇の中の仏様の光背が鈍く金色にゆれた。ぼんやりとその光に見入りながら、遠い遠い昔、まだ星雲すらも無かつた頃の宇宙創成の日を頭の中に描いてみる癖がいつの間にかつた。本当に何物も無い虚空に、眼に見えない力の渦巻があつて、その回る速さがだんだん速くなって行く。するとその中心のあたりからは白くガス状の物質が生まれて来る。そういう夢と老人の読経の声とがもつれ合つて、いつの間にか、生まれたばかりの星雲の姿が、ぼんやりと眼に見えて来るのであつた。

今の科学精神などという流儀から言えば、とんでもない教育を受けたものである。生活の中に科学をとり入れるようなことも、全く縁の無い話であつた。そして学校では実物を完全に離れた文字だけの理科を教わり、家へ帰つては三国志と西遊記とに凝っていた。たまさか新しい科学の知識を授けられれば、それは「断片的な科学知識」と「出来上がつた理論の外画」だけであつた。それらは西遊記と仏教寓話とで養われた荒唐な少年の日の夢に、ますます非科学の拍車をかけるような結果に陥ってしまった。科学者にでもなろうというのだったら、典型的な悪い教育を受けたものである。ところがこの頃になつて考えてみると、こういう少年の日の反科学的な教育が、自分のその後の科学にとって、5ひどく邪魔になつたとは思われない。そういう天邪鬼な考えをするから何時まで経っても一人前の科学者にならないの

だと言われれば、それまでの話である。しかしあの当時に、現在の立派な科学普及書がふんだんに与えられ、文部省の自慢の啓発的とかいう今日の物象の教科書で理科を教わっていても、**①** 偉い物理学者にはなれなかっただろうと思う。それよりも恐らく物理学などは専攻していなかったかもしれないという気もする。別に確固たる理由は無いが、

② 何となくそういう気がするだけである。**③** 理由をつければ、大人が余りやきもきすると、子供は興味を失ってしまうことが多いからである。

星雲の夢が再び蘇って来たのは、高等学校へはいってからである。ヘッケルの『宇宙の謎』の翻訳が出て、その一元論が我が国の読書界に紹介されたのが、ちょうど私たちが高等学校へ入学した頃であった。ヘッケルの進化論というのは、正しく私たちが小学校で聞かされた話を、少し鹿爪らしくしたようなものであった。そしてその最後のところは、物質と勢力との一元論に落ち着くというのであった。別に根拠のある説ではないが、物質不滅の法則と勢力不滅の法則とが自然界を貫く二つの根本原理である、その両者を総合したような宇宙一元論を心に描いてみるのが科学者の最後の夢である、という風な議論であったように憶えている。

もう二十五年以上も昔の話であるから、もちろん詳しいことは記憶にない。しかしヘッケルの本の最後の数節は、いろいろな科学的な言葉は使ってたが、煎じつめたところは、物質と勢力との一致という夢を描いたもののようであった。物質と勢力との転換が、理論的にまた実験的に物理学の問題として確認されたのは、ずっと後のことである。ヘッケルの時代にはもちろんのこと、それを読んだ私たちの高等学校時代の頃でも、それは精密科学の立場から見れば、全くの**⑧** 無稽な空想にすぎなかった。

しかしこの本は、私には少年の日の夢を再び呼び返してくれたという意味で大切な本であった。今読み返してみたら、そういう意味に書いてあったものではないかもしれないが、熱中し易い高等学校時代の自分の頭に残された印象は、そのようなものであった。もし自分が勝手にそういう風に解釈して、興奮にはてる頬を輝かしながらこの本を読んだのであったならば、それは少年の日の非科学的教育の影響によったものであろう。(中略)

科学の本質論にはここでは触れないことにしても、本当の科学というのは、自然に対する純真な驚異の念から出発すべきものである。不思議を解決するばかりが科学ではなく、平凡な世界の中に不思議を感じることも科学の重要な要素であらう。不思議を解決する方は、指導の方法も考えられるし、現在科学教育として採り上げられているいろいろな案は、結局この方に属するものが多いようである。ところが不思議を感じさせる方は、なかなかむずかしい。

物象の何年生だったかの教師用に、秋の山へ児童をつれて行くと、楓だの漆だのが美しく紅葉している、その葉の色の美しさを示して、自然界の美に驚嘆するように児童の情操を涵養せよというような意味の説明がある。しかし本当の驚異はなかなかそう手軽には感じさせられないものである。それに注文通りの秋の山など、そうざらに**B** ものでもない。もともと紅葉の美しさに注意を向けさせることが悪いと言っているのではない。それみたいへん結構なことではあるが、それだけで、という意味は、その系統に属する各種の指導だけで、驚異感の方は**C** がつくと思っはは十分であらう。

近代の専門的な教育法のことには知らないが、私には自分の子供の頃の経験から考えて、思い切った非科学的な教育が、自然に対する驚異の念を深めるのに、案外役に立つのではないかと疑問がある。幼い日の夢は奔放であり荒唐でもあるが、そういう夢も余り早く消し止めることは考えものである。海坊主も河童も知らない子供は可哀想である。そしてそれは単に可哀想というだけではなく、余り早くから海坊主や河童を退治してしまうことは、本当の意味での科学教育を阻害するのではないかとも思われるのである。

(中谷宇吉郎「簪をさした蛇」より)

*人跡未踏…… 人がまだ誰も踏み入れたことのないこと。

*簪…… 髪飾り。女性の頭髮にさす装飾品。

*講談…… 寄席演芸の一種。軍記・武勇伝・かたき討ちなどを、おもしろく調子をつけて読んで聞かせる話芸。

*カント・ラプラスの星雲説…… 一七五五年にカントが唱え、一七九六年にラプラスが補説した、太陽系の起源についての説。

*無機物…… 水・空気・鉱物および炭素をふくまないものからなる物質。

*物象…… 旧制中学校の教科の一つ。物理・化学・鉱物学などを総合したもの。

*ヘッケル…… (一八三四―一九一九年) ドイツの生物学者。

*鹿爪らしい…… まじめくさって、堅苦しい感じがする。もったいぶっている。

*精密科学…… 数学・物理学・化学など、量的に規定される科学の総称。

*涵養…… 水が自然に染み込むように、無理をしないでゆつくりと養い育てること。

問1 A、C に入る最もふさわしい漢字一字を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

問2 B に入る最もふさわしい言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

問3 ① ③ に入る最もふさわしい言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

問4 線5「天邪鬼」、線7「やきもき」の意味を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

5 「天邪鬼」
ア 目上の人に対してこびへつらう人 イ 自分の思い出を大切にしている人
ウ わざと人にさからう言動をする人 エ 論理的に物事を考えようとする人
オ 人間関係を重んじて生きている人

7 「やきもき」
ア あれこれと気をもんで、いら立つさま
イ 緊張してこわばり、落ち着かないさま
ウ 自分よりも優れている人をねたむさま
エ やる気がありすぎて、くるおしいさま
オ てきばき行動せず、時間を費やすさま

問5 線8「□□無稽」は「でたらめ」という意味の四字熟語である。この空らんに入る漢字を本文中からぬき出さなさい。

問6 線10「方は」とあるが、これはどの語に係るか。次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 解決する イ 考えられるし ウ 採り上げられている
エ 属する オ 多いようである

問7 線1「人々はお正月には『殿様のところへ伺候する』習慣をずっと守っていた」とあるが、筆者はここで何を言おうとしているのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 年に一度は殿様を中心として互いの結束を確認するように、共同体が信頼を基にして成立しているということ。
イ 忙しい時期に大人たちがこぞって権力者に頭を下げに行く習慣に、子供たちは違和感を覚えているということ。
ウ 自分たちの領主に対し尊敬の念を抱くとともに親近感を持つような、温かい関係が形成されているということ。
エ 時代の流れにのみこまれて没落した旧領主をいつまでも大事にする、義理人情に厚い土地柄であるということ。
オ 社会体制が変わって意味の無くなった因習を守りつづけるような古い体質が、町全体に残っているということ。

問8 線2「簪をさした蛇」とあるが、「蛇」はなぜ「簪」をさしているのか。その説明である次の文の に入るふさわしい内容を自分で考えて入れ、説明を完成させなさい。ただし、「非業」という言葉を必ず用いて指定された字数(句読点などの記号も一字とする)で答えること。

蛇は (十五字以内) 生まれ変わりだから。

